
科研をふり返った感想

和田 正広：九州大学文学部

私が重点領域研究（九大川勝班）で具体的にお手伝いした仕事といえば、最後の年度に明実録の中の琉球史料をデータベース化したものの点検作業くらいであったが、これには意外と時間がかかった。私は明代中期に至る期間（洪武～成化初年）までの編年体史料のうち、データから漏れた部分を拾い出して縷々筆記したが、そこには想像力を掻き立てる何か不思議な力が秘められているように思えた。以下は、雑感を幾つか並べたもので過ぎない。

貢物は馬（匹）・方物か又はその何れか1つで一貫しているが、問題はその中味である。洪武9年4月（甲申朔）刑部侍郎李浩が琉球に出向して馬40匹と硫黄5千斤とを買付けて帰国した報告の中では、琉球の人々は高価な絹織物には関心は示さず、磁器や鉄釜といった実用的なものを求めている、と述べられている。ここに見える硫黄は、のちに貢物としても現れるので（洪武15年2月乙丑、同28年4月庚午）方物の中には硫黄が入っていたことは察しがつく。ただ、東南アジア産の蘇木等も方物の中味に含まれていた可能性は推測できる。例えば、洪武27年正月（甲寅）太祖朱元璋は、琉球・カンボジア（真臘）・タイ（暹羅）の入貢を許可すると同時に、中国沿海の民が海禁政策を無視して、それらの国と特産の香木や貨物の貿易を行ない、番夷の人を誘って盗賊行為に走ることを厳禁し、重罰を設定している。又、永楽2年9月（壬寅）永楽帝は福建に漂着したタイ船が琉球に向う通好使節の船であるとの報告を受けると、「羅国と琉球との修好は番邦の美事なり」と述べて、番・夷の政治・経済的交流を奨励したのち、タイ船の修理・給食方や風待ちによる道案内まで命じている。

次に馬については、上述の中国官僚が40匹を買付けたこともあったが、常に朝貢品として見え、頭数としては20匹（洪武15年2月乙丑）とか110匹（永楽8年3月辛未）とかが確認できる。正統2年6月（甲子）行在礼部は、琉球の貢馬が小型であることに不満の意を表明し、背の高い大型の馬を貢物とするようにさせた方が宜しいのではと皇帝に報告したところ、遠方から中国を慕ってやって来る気持ちこそが大切に、物の優劣などを問題とするべきではない、とたしなめられている。

正統4年8月（庚寅）の朝貢使節であった通事林惠・鄭長らの随行人員は、200余名に上った。福州の琉球館に宿泊した彼らに対しては、福州等の府県が何日か毎に廩米のほか、里甲から供出させた茶・塩・酢・みそ等を支給していたが、その費用は不足がちであった。彼ら随行人員は、中国役人の支給が滞りがちになると罵声で怒鳴ったり殴るなどの暴力に及んだため、寛容な態度に努めていた皇帝も、この時は文書で使節に戒諭している。

しかし、概して中国皇帝は朝貢時の交易上においても、琉球が王法の遵守に優れる点から他夷とは区別して優遇すべしとの観点を堅持していた（実録正統2年2月壬申、同景泰6年3月乙丑）。